大津歴博だより

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

2021
No.
124

contents

御遠忌記念企画展 西教寺 P1～P3、P6 ―大津の天台真盛宗の至宝―

学芸員のノートから 日記史料の解読作業 P4 ～大津に残る膨大な古記録～

収蔵品紹介 木屋仙右衛門家文書 P5（令和２年度追加購入分）

大津市歴史博物館
令和３年９月１日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2
TEL(077)521-2100
http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

聖徳太子1400年御遠忌・伝教大師1200年御遠忌記念企画展

西　教　寺　―大津の天台真盛宗の至宝―

会期：令和3年10月9日（土）～11月23日（火・祝）

今年は西教寺さんの記念の年にあたります。

比叡山延暦寺の横川（よかわ）の山麓、大津市坂本五丁目に所在する天台真盛宗総本山西教寺は、戒律と念仏を重んじる一派として興隆する寺院で、飛鳥時代に聖徳太子の創建という伝承があります。2021年（令和3年）の本年は、聖徳太子1400年御遠忌（ごおんき）と、比叡山延暦寺を開創した伝教大師最澄の1200年御遠忌の年にあたります。大津市歴史博物館ではそれを記念して、西教寺の展覧会を開催します。

さて、西教寺は天台真盛宗の総本山ですから、仏像や絵画、工芸、書跡などといった各分野のご宝物がとてもたくさん伝来しています。展覧会では、それらを一堂に集めてご紹介する予定ですが、今回の歴博だよりでは、その中でも中国や韓半島からの舶来品や、異国的な宝物についてみていきたいと思います。

❶重文の天台大師像は、本場中国の南宋時代の名品。

まず、天台宗の実質的な祖といわれる、中国の隋時代の高僧、天台大師智顗（ちぎ）（538～598）の肖像画【写真1】が残っています。画面の左下に「大宋慶元府張思訓筆」とあり、中国の南宋時代（1127～1279）の慶元府（現、浙江省寧波（にんぽー）市）の画家、張思訓によって描かれたことがわかります。寧波は日本船が多く往来し、天台山も近いことから日本の僧侶が多く遊学した場所です。おそらくここを訪れた延暦寺僧によって比叡山に請来され、西教寺に残ったものと思われます。中国製の天台大師の古画はほとんど知られておらず、中国の仏教史のみならず、中国の高僧の肖像画を研究するうえで極めて貴重な作例です。

【写真１】重要文化財　天台大師像

❷全国的にとても珍しい、金～元時代の銅鏡。

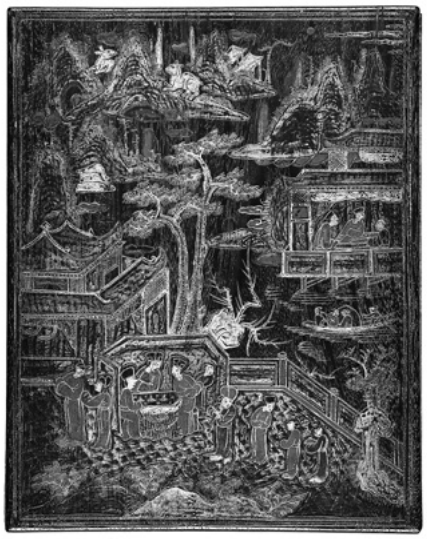
「人物文鏡」【写真2】は、鏡背に唐服をつけた人物がたくさん表されている銅鏡です。よく見ると鶴とともに福禄寿のような姿をした雲に乗る老人も表され、吉祥文が高肉に鋳造されています。本鏡の鈕坐や周縁の形は、中国の金時代（1115～1234）から元時代（1271～1368）にかけて、中国東北部において流行したものに近似し、本鏡も12～13世紀頃にこの地方で制作されたものと考えられます。面径が24.7cmあり、この時期の八寸の大型鏡は中国国内でも現存作例が極めて少なく、本鏡はかなりの珍品ということができます。なぜ西教寺に伝来しているのかは全くの謎ですが、法勝寺流の戒灌頂で使用されていて、京都の法勝寺が西教寺に合併された際にもたらされたのかもしれません。

【写真２】 人物文鏡

❸長崎奉行、長谷川藤広が奉納した異国のお品。

長崎奉行や堺奉行を勤めた長谷川藤広（西教寺に墓所があります）が、徳川家康の追善のために元和2年（1616）に西教寺に寄進したものが、「花鳥獣文様刺繍打敷」【写真3】と、「南蛮硯箱」【写真4】です。前者は、仏壇や前仏具に掛けて敷くもので、鳳凰や尾長鳥、牡丹、麒麟、虎などの文様を刺繍で表したものです。カラフルな色彩と、ややコミカルな動物の表現は異国情緒たっぷりです（残念ながら今回は展示しません）。後者は、箱書きに「明智公所持　南蛮花輪文匣同硯箱（後略）」とあるもので、「南蛮花輪文匣（匣は手箱）」は未確認ですが、硯箱が本作品にあたります。蓋の表には中国人男性と思われるたくさんの人物や、急峻な山々、楼閣などが異国風に描かれています。「密陀絵」と呼ばれる油彩画技法が使用され、16世紀の琉球（現在の沖縄）あたりで制作された可能性があります。さすがは日本の玄関口の長崎奉行、エキゾチックなお宝を西教寺に奉納してくれたようですね。

【写真３】 大津市指定文化財
花鳥獣文様刺繍打敷



【写真４】 南蛮硯箱

❹この甘露図は、世界で２番目に古い!?

甘露図【写真5】は、すべての衆生の魂を往生させる目的で行われる水陸斎や四十九斎といった儀式で使われます。朝鮮半島独特のもので、わが国で制作された形跡はありません。内容としては、お盆に行う先祖の供養と、救われず、また祀ることもされない霊魂の成仏のために施餓鬼供養を行い、鎮魂することを表しています。銘文によれば、明の萬暦18年、つまり朝鮮時代の宣祖24年（1590）に描かれたことがわかります。甘露図は、本家の韓半島には約40例現存するものの、16世紀に遡るものは1点のみしかありません。一方、日本国内には古い例がいくつか知られ、本図は、前年に造られた神戸市・薬仙寺本に次いで現存する世界で2番目に古い大変貴重な作例です。

【写真５】 甘露図

❺通称「南蛮屏風」。いったいどこの風景？

また、西教寺には「南蛮屏風」【写真6】と呼ばれる、「中国風俗図屏風」ともいうべき不思議な風景を描いた屏風があります。八曲一双で、縦が162.6cm、横が455.0cmあり、大きくてなかなか立派なものです。山や川に囲まれた中国の城壁の内外（お寺が多い）で、たくさんの人々が生活やお祭りをしている風景をいているようですが、具体的にどこの場所なのか、さらには画題の意図についてもはっきりとは言い切れません。

ただし1つだけヒントがあり、左隻（させき）のお寺の門の額に「湘山寺（しょうさんじ）」と書いてあることです。湘山寺は、現在の中華人民共和国広西チワン族自治区の桂林市全州県にある、唐時代に建立されたお寺です。また、絵の中で湘山寺の横に「飛鸞橋」が描かれていますが、『全州志』によれば、紹興年間（1131～62）にこれを修理したとあり、湘山寺の近くにあったようです。ですから、左隻のこのお寺が桂林の湘山寺の境内の様子を描いているということは確かなようで、左隻は全体として桂林の町並みなどを描いているのかもしれません。

一方の右隻も似たような光景を描いていますが、具体的な場所を表す書き込みがありませんので、場所を同定することは現段階では難しい状況です。左隻に描かれる川が「瀟湘（しょうしょう）八景」で著名な「湘江」ですので、右隻の川も同じであれば、湘江沿いの歴史のある街（例えば、「長沙」など）である可能性も想像されます。

いずれにしても、なぜ中国南方の桂林の光景を描いたのか、何に使用されたのかなど謎だらけで、今後の研究の成果が待たれます。南蛮屏風とお寺で呼ばれているくらいですから、ひょっとししたら南蛮船によって日本に図柄が伝えられた、もしくは、本画そのものがもたらされたという言い伝えがあったのか、さらには長崎奉行長谷川藤広によって、他の宝物とともに奉納されたのかもしれません。

❻天台真盛宗なのに、「黄檗宗」様式の仏像が。

西教寺の坊、禅明坊には、一風変わった地蔵菩薩像【写真7】が安置されています。全身に漆箔が施されているので金色に光り、着衣はその上に岩絵の具で文様を描いています。また、目がかなり細く、しかもうねりを持つ吊り目であるところ、耳たぶがかなり大きく、不貫通（通常は環状貫通）にする表現などは、日本の仏像ではあまり見られない特色です。実はこれらは、中国の清から来日した禅僧で、黄檗宗（おうばくしゅう）の開祖、隠元隆琦（いんげんりゅうき）（1592～1673 インゲン豆のインゲンさんです）が中国の清から請来した独特の仏像様式なのです。わが国では黄檗宗寺院に安置しているくらいで、個性的な作風ですから、他宗では通常はまず見られないものです。西教寺には、別の坊にも黄檗様式の阿弥陀如来坐像も伝わっており、なぜ天台真盛宗の西教寺に黄檗様式の仏像が伝わっているのか、まったくもって謎です。江戸時代初期のお坊さんで、新しい禅宗の異国趣味の方がいらっしゃったのでしょうか。

【写真７】地蔵菩薩坐像

以上、西教寺に伝わる舶来、もしくは異国的な宝物をかいつまんでみてきました。そもそも仏教はインド発祥で、中国・朝鮮経由で伝わった宗教ですから、お寺に異国的なものがあるのはしごく当然です。とはいえ、今回触れた西教寺の宝物はなかなか個性的で興味深いものが多く、しかも世界的にも貴重なものが伝わっているのは驚愕に値します。ぜひとも展覧会で現物をご観覧いただき、国際色ゆたかな宝物を楽しんでいただけたらと思います。

（学芸員　寺島典人）

【写真６】　南蛮屏風　左隻

【学芸員のノートから】

日記史料の解読作業～大津に残る膨大な古記録～

毎日欠かさず日記をつけるという方に質問です。その日記が100年後、200年後の未来に、博物館や地元郷土史家などの手によって、昭和～令和の世相を読み解く重要資料として解読され、史料集として刊行されるかもしれないことを想像したことがあるでしょうか。筆者は、まったく日記をつける習慣はありませんが、ずっと昔の、特に江戸時代の大津の方々が書いた日記を解読し、書き手の眼を通して見えてくる当時の歴史や文化を読み解き、紹介することを仕事の一つとしています。江戸時代の大津の人々は、まさか自分の日記が一字一句解読されて公表されることなんて想像もしなかっただろうと思います。

今回のお話は、いま大津市域に残る日記を順次解読し、史料集にして公開する博物館活動にまつわる作業紹介です。

少し「日記」について説明しましょう。時間をずっとさかのぼり、平安・鎌倉時代以降、朝廷社会を中心に儀式や政務、年中行事など、後々に参照したり照合したりするために「日記」が作成され始めました。やがて、それが僧侶や武士層へ広がり、様々な形や内容の日記が誕生していきます。その一方で、江戸時代になると、識字率の上昇に伴って徐々に個人日記も増加していきます。また、文書による通達や命令などによって領主支配が進展すると、命令書や訴願書、お触れ書など、様々な文書を写し留めた記録類も含め、村や町、諸集団などの組織においても日記（古記録）が作成されるようになりました。つまり、今に残る古い時代の日記や記録というものは、もちろん個人的な感想や出来事を書くこともありますが、組織や家の経営・存続にかかわる情報を書き残し、後々に参照されるために子孫に宛てた重要な財産であったともいえます。したがって古い日記や記録は、当時の世相だけでなく、政治・経済・文化、あらゆる歴史情報を読み取ることのできる膨大なデータベースといえます。

大津市域には、こうした古い時代、特に江戸時代の日記史料（一部、記録も含め）がたくさん残されています。いま、当館蔵の主な日記・記録を表にしてみました（2年以上続くもののみ）。琵琶湖水運や寺社に関わる人物によるものが大部分を占めます。これらはある程度、例えば10数年、あるいは100年以上、組織や親子を超えて書き継がれたものです。ここには取り上げていませんが、大津市域には、数か月、あるいは1年だけしか残らない日記も膨大にあります。

1冊だけでも何万字、何十万字に及ぶものもあります。すべてを解読しても、解読に間違いがないか、原本を見ながらの校正作業も欠かせません。また、注釈を付けたりもしないといけません。表のすべての日記・記録を解読し終えるのは一体いつになるのか、果てしない作業になります。ところで、現在表の②・⑦・⑧については、市民グループの大津古文書輪読会、大津古文書研究会によって解読が進められています。博物館では貴重な成果として、原本照合を含めて史料集にしてホームページなどで公開する準備を進めています。果たしてどんな歴史情報が詰まっているのか、公表を乞うご期待！　（学芸員　高橋大樹）

	日記名称	期間・冊数・内容（欠年や分冊を含む）
①	船道仲間諸色留帳 （船道郷士）	享保3年（1718）～慶応4年（1868）、40分冊 本堅田に拠点を置く琵琶湖水運に関わる集団の記録
②	大津百艘船万留帳 （大津百艘船仲間）	延宝9年（1681）～嘉永6年（1853）、64冊 琵琶湖水運の利権を握った大津の船仲間集団の記録
③	大津御用米会所要用帳	享保20年（1735）～明治8年（1875）、22分冊 米価の統制などの役割をになった膨大な記録
④	日吉社司生源寺家日記	明和4年（1767）～明治4年（1871）、64冊 日吉大社の動向を知る社司（家）の輪番日記
⑤	日並雑記（山門公人景山家）	文政9年（1826）～慶応4年（1868）、51冊 坂本で比叡山延暦寺雑用を担う人々の日記
⑥	末門雑記（山門公人景山家）	文政11年（1828）～明治2年（1868）、37冊 比叡山延暦寺東塔北谷の末寺との往信記録
⑦	膳所藩町奉行 川那辺壮右衛門日記	嘉永2年（1849）～嘉永3年（1850）、4冊 膳所の町政を管轄した奉行の日記
⑧	膳所藩士羽太家日記	天保7年（1836）～明治39年（1906）、2冊 奥付部局を勤めた膳所藩士の大部な日記
⑨	円満院坊官西坊家日記	寛保元年（1741）～大正15年（1926）、145冊 円満院坊官として諸寺との折衝を担った人々の日記

当館蔵の主な日記・記録の一覧

日吉社司生源寺家日記（全体、表の④）
解読は終了していますが、校正はこれからの作業です。

収 蔵 品 紹 介

木屋仙右衛門家文書（令和２年度追加購入分）

令和2年度に購入した木屋仙右衛門家文書。当館では平成29年度に同家の古文書を購入していますが、前回購入分が商売と家関係文書が中心だったのに対し、今回追加購入したものは、水戸藩関係のものや他藩との関わりを示すものが多数含まれていることが特徴です。

木屋仙右衛門家は大津町の湊町の商人であり、名字は池田です。 同家は「木屋」を屋号とし、代々当主は仙右衛門を名乗り、米や油を取り扱っていました。

木屋仙右衛門家文書

安政4年（1857）9月に水戸藩より「御国産之品売捌并西国筋国産直御仕入方」に任命されました。これは、水戸藩領内で生産された品（御国産之品）の売りさばきと西日本で生産された品（西国筋国産）を直接仕入れる役割を任されたことを示しています。

では、木屋仙右衛門が売りさばきを依頼された水戸藩の国産品とはどのような品だったのでしょうか。「干鰯」（鰯を乾燥させた肥料）、「西之内紙」（現在の茨城県常陸大宮市野上・舟生地区で生産される手漉き和紙）、「〆粕」（鰯などの魚類の油を取った残りかす）、「蒟蒻（こんにゃく）粉」、「魚油」、「鮭塩引」、「紅花」、「天草（甘草のこと）」の8種類だったようです。

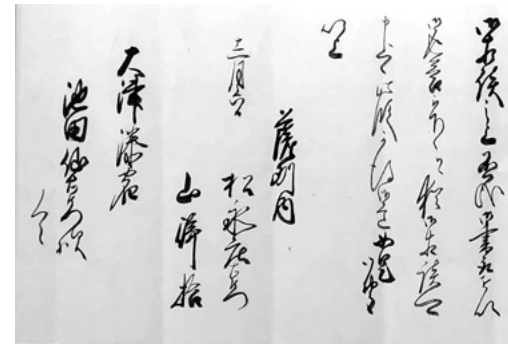
水戸藩関係のものは、多数の文書以外にも「水戸御用」と上書きされた木挟や「水戸御用飛脚」と書かれた木札も残されています。これらの木挟や木札を利用して、木屋は水戸藩の御用に関する文書を届けていたのでしょう。

このようなものが残されているということ自体大変珍しいことであり、どのように文書が運ばれたかを知る重要な手掛かりになるのではないでしょうか。

さらに注目すべきは、堺の酢屋弥助に西国の国産品の水戸・江戸への回漕（かいそう）と上方での水戸の国産品の売りさばきを請け負わせていることです。幕末には西廻り航路が定着し、西国の物産品は大坂や堺に集められ、そこから船で江戸へ運ばれていました。また、大坂・堺のほうが大津よりも相場が高く、より高値で売れるという事情があったようです。

以上、水戸藩と木屋との関係についてみてきましたが、次に薩摩藩と木屋との関係についてみていきましょう。

安政2年10月2日午後10時頃、関東地方南部を大地震が襲いました。安政江戸地震です。犠牲者は約1万人、倒壊家屋は約1万5千戸、江戸にある大名や旗本の屋敷も多数被害を受けました。薩摩藩も被害が大きく、死者2人、幸橋門内の中屋敷の長屋が焼失、三田の藩主居屋敷の長屋が倒壊などの被害を受けました。その薩摩藩から木屋に対して、5万両もの大金を貸してほしいという依頼があったのです。毎年1万両ずつの返済、利息は相談の上決定するという条件でした。5万両は現在の価値に換算すると、おおよそ100億円もの大金です。相当な資力がないと用立てできないことがお分かりいただけるのではないでしょうか。果たして薩摩藩の要求通り木屋が5万両を用立てたのかは不明ですが、それほどの大金を用意できる有力商人とみなされていたことがわかります。


薩州内松永庄右衛門・山﨑格連署状（部分）

このように、幕末の大津には、政局を大きく動かすことになる水戸藩や薩摩藩と関わった町人がいました。激動の幕末において、大津には木屋家のようにさまざまな形で藩の活動を支えていた町人がほかにもいたかもしれません。

（学芸員　五十嵐正也）

【企画展の作品から】

ピンク紙に金泥で字と絵をエキゾチックに描くお経

礼仏阿弥陀懺（巻末）

西教寺には、『礼仏阿弥陀懺』というちょっと変わったお経が伝来しています。『礼仏阿弥陀懺』とは、『阿弥陀経』を読みながら悪業罪過を悔い改め、極楽浄土を願う儀式（阿弥陀懺法）の経文を書いています。大きさは、縦が40.3cm、折幅は14.9cmあり、全長が221.5cmで、さらに第1紙が1,184cm、第2紙が1,252cmもあり、かなり大きく、そしてしっかりと厚みと硬さがある料紙を使用しています。

桃色に近い赤色の料紙に、金泥によって経文が勤厳な書体で書写されていて、天地の余白は広めで、宝相華唐草文があでやかに埋め尽くされています。また、巻末には、阿弥陀三尊を中心とする極楽浄土の様子が描かれています。

ここで描かれている仏像はすこぶる異国的で、幅広の花びらのような光背をおい、如来坐像の頭部の肉髻が三角形に尖り、着衣に大柄の蓮華を文様に使用するなどの特色は、日本の作例ではあまり見られないものです。本経は元や高麗時代の影響を残した15世紀頃に、明、もしくは朝鮮時代の制作ではないかと考えられています。

さて、本経の一番の特色は、ほぼ桃色に近いとても綺麗な赤色系の料紙を使用していることです。この色の上に金泥で経文や絵を描くさまは、なかなか美しく、見映えがします。このような類例は我が国のみならず、中国や韓国でもほとんど現存作例がありません（京都市・知恩院の説相十六経が、赤色金泥で近いものですが、色は濃い）。ですから本経は、東アジアの経典史上、とても珍しく貴重な作例ということが出来るでしょう。

そして、箱蓋裏墨書銘をみると、草津市芦浦の観音寺の第12世豊舜法印（～1665　西教寺正教蔵を蒐集した舜興の甥）の寄附とあります。さらに別に書付があり、京都市にあった法勝寺に伝来したらしいことがわかります。おそらくは、17世紀後半に豊舜が法勝寺の遺品として入手し、法勝寺の合併先である西教寺に寄付したのかもしれません。

なお、1紙のみですが、同じく赤地金泥の『仏説阿弥陀経』が付属しています。現状の法量が若干異なりますが（縦40.9cm、横14.5cm）、経文を書写した部分は同じ大きさであり、余白の中の宝相華唐草文も同じ形をしていることから、同じ工房で制作されたものと思われます。ちなみに延宝9年（1681）に記された西教寺の『萬物寄進帳』によれば、芦浦観音寺豊舜が寄進した宝物3つのうちの一つとして「勅筆弥施経切　一巻」とあるのが本経にあたると思われます。残念ながら1紙のみしか残りませんが、これにより西教寺には珍しい「赤地金泥経」が、なんと2例も伝わっていることになります。

西教寺にはエキゾチックな宝物が色々とありますが、なかでも本経は「ピンク色の紙」に書くという珍奇な経典で、仏教文化の多様さを示す好例といえるでしょう。今回の展覧会において初公開しますので、見逃さずに観ていただきたいと思います。　　（学芸員　寺島典人）